
白い暗殺者～番外編～

い～ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い暗殺者（番外編）

【Zマーク】

Z6857B

【作者名】

いーちゃん

【あらすじ】

東武風牙と柊香澄の昔の話。風牙がフラれる話。それと香澄のファーストキスの話です。本編とはほとんど関係がありません。番外編だけでも楽しんでいただけます。

今は8月。

夏休みの真っ只中である。

風牙と香澄が中3の時……つまり2人が黒征学園に入る1年前の話である。

この夏には風牙には彼女がいてその彼女に振られるエピソードを皆さんに教えましょう。

風牙はせっかくの夏休みなのに彼女である寺嶋夏実と全く遊ぼうとせずには自由な休みを過ごしていた。

夏実は何回デートにわざつても断り続ける風牙に脾を切らして電話をかけた。

「もしもし！？風牙くん！？」

「あ～夏実か？？今日は……。」

「今日」Jリーグデートしてもらいます……。」

「今日は……用事があつたり……。」

「どんな用事！？宿題とお墓参りと学校の呼び出しどと前々から入つてた友達との約束って言い訳はもう言つたわよ。」

「うつ…………！」

つて事で風牙はとうとう根負けして「デートをする事になつた。

「夏実はすぐベタベタくつづいてくるからなあ。このクソ暑いのにそれが嫌で断つてたのに。」

ちなみに風牙の部屋の冷房器具は只今故障中。

「しかもあいつの事だから今日は泊まつて行くとか言つんだらうな……。」

独り言を言いながら風牙は部屋を片付ける。

「キスしたら満足して帰るかな？？」

そう言って風牙はベットに寝転がつた。

「……い。ふ…が。」

風牙は快適な睡眠から現実に引き戻される思いを感じた。

「風牙！…そろそろ起きてよ……」

「もう…ちょつと……。」

「こら……寝るな……」

風牙は自分を強く握すつている手を掴んでベットに引き込んだ。

「え！…？ちよ、ふ、風牙！…？なにす……！…！」

反抗をする声を封じるために風牙はキスをした。
始めは抵抗しようとしていたが風牙が抱き寄せるとおとなしくなった。

「バンッ！…！」

とドアが強く開けられる音がする。

風牙が唇を離して振り向く。

「おい…！勝手にドアを……」

親だと思つて話しかけた風牙の口に飛込んだのは夏実だった。「え
…と……。」

意味がわからない風牙は自分の腕にある柔らかい感触の元を見る。
そこには顔を真っ赤にした香澄がいた。

「…何してんの？？風牙くん？？」

夏実はまだ穏やかに話しかける。

「あ、これは…！起こされたから夏実だと思つて、うるさいからキ
スし……。」

「言い訳しないで…！」

風牙は口をパクパクさせる。

「やっぱり浮氣してたの？？ふーん。柊さんだつけ？？幼馴染みだ
よね。」

「あ……これはじ、事故で……。」

香澄も弁解をしようとする。

「何？？あなたも共犯！？抱き合ひてキスしてたくせ！」

香澄にも怒りを向ける夏実。

「あんた風牙くんに私がいるの知つてるでしょ！？あなたが風牙くんの事好きなのは構わないけど風牙くんを誘惑しないで！？」

「なっ！…す、好きな訳ないでしょ！…」

「じゃあ何でキスしてたのよ！？」

「だから事故で……！」

「言い訳するな！…泥棒！…」

言い争いが始まってしまった。「これが修羅場かあ。人生初だなあ。

」風牙は呑気に独り言をつぶやく。

「だいたい、私に文句言わないでよ！…デートもしてもうえないくせに！…」

「私に文句言うな！…」

「う、うるさい！…ただの幼馴染みなのにでしゃばらないで！…」
やつと責任を感じたのか風牙が止めに入った。

「おい、もうやめと……」

「「あんたは黙つて！…」

あえなく粉碎。

かなり立場の弱い風牙であった。

それから数分間、香澄と夏実は言い争いを続け、今度こそ止めようと風牙が近付いた。

「俺が悪かったから。もう言い争いやめろよ。」

そう言って一人の肩に手を置く。

「パン！」

といい音が鳴り響いた。

夏実が風牙の頬を叩いたのだ。

「つるさい！…あんたいたら疲れる！…もう別れて！…」

「……。」

反応しない風牙を睨み付け、夏実は部屋を出でいった。

「追い掛けなさいよ。」

香澄が風牙を見ずに言つ。

「追い掛けても無駄だらうな。完璧に嫌われたみたいだし。」

「どうせあんま好きじやなかつたんでしょ??」

「そんな事ねえよ。大恋愛ではなかつたけどな。」

珍しくテンション低めの風牙。

まだ怒りが治まってない香澄。

気まずい空気が流れれる。

「あんたが悪いのよ。ほつたらかしにするから。」

「今回は少なからずお前にも責任があるだろ。」

「ないわよ。私のファーストキス奪つたんだからそれくらいの代償は当然です。」

「失恋の慰めに今度は香澄からしてくれよ。」

「絶対嫌!!!」

と、まあ今ではいい感じの一人ではあるが昔はいつも言つた感じだったのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6857b/>

白い暗殺者～番外編～

2010年12月14日21時06分発行